

南北朝時代の太友氏

建武三年（一三三六）三月二日、尊氏は筑前の多々良浜で菊池武敏を破り、弟直義は大宰府にはいり、尊氏は箱崎に陣して西国の軍勢をつのった。戸次頼尊・田原直貞・志賀頼房・狭間政直以下の太友一族および野上資氏・富来忠茂らの御家人は、伊豆から京都・丹波・兵庫から九州まで、終始尊氏軍に従って長途の機動作戦に従事したのである。尊氏が再起を九州にもとめたのは、こうした太友以下の九州勢の合力があったからであった。

玖珠城の戦い

久大線で玖珠盆地を通ったものは、万年山の麓に、卓状の形をした標高六八五メートルの切株（断株）山という山に気づくであろう。この山は「豊後風土記」に、昔ここに大樟樹があり、その切株が化してできた山であると記されている。山上には、かつて洪樟寺＝高勝寺という寺院があったといわれ、ここが中世山城となって高勝寺城、または玖珠城とよばれた。足利尊氏が九州にくだって菊池武敏を破り、軍勢を集めて勢力をもちかえすと、天皇方の軍勢がこの高勝寺城にこもり、ここが九州における反尊氏軍の拠点となったのである。玖珠郡には皇室御領が多く、しかもそれはすべて大覚寺統御領であり、かつ、この城が万年山をへて肥後国に接し、菊池氏らと連携をとるのに好都合な要点であったからであろう。

籠城軍の判明するものは、小田顕成・魚返宰相房らの玖珠郡内豊後清原一族、日田の日田檜原兵衛次郎・敷戸普練・賀来弁阿閻梨・同舎弟孫五郎・沙弥道円の大分郡の武士、太友一族では太友貞順・入田土寂などであった。前に指摘した通り、太友貞順は氏泰の兄でありながら惣領に選ばれなかったものである。このように、天皇方に惣領に選ばれなかった庶子家が味方しているのをみると、この戦乱が大義名分の戦いというより、当時の武家社会のかかえた家族制度上の根本問題が、本質的な底流となっていることが考えられる。

尊氏は軍勢を催促するとともに、仁木義長に命じて菊池城の菊池武敏を攻めさせ、一色頼行を玖珠城攻めの大將として派遣した。頼行は軍勢をひきいて大宰府を出発し、建武三年三月二十四日玖珠城についた。これから十月十二日の落城まで、八カ月の攻防戦がこの山中の小城を中心として展開される。

攻撃軍に加わった足利方の軍勢を、着到状や軍忠状でみると、豊後勢ではやはり同郡内の清原一族である野上顕直・綾垣政明・野上資紙・帆足清六左衛門人道らがおり、同族の分裂現象がみられる。他郡の武士としては、都甲惟世・同惟元・植田寂円・子息能綱・戸次頼時・同四郎入道・同与三・江浦六郎次郎入道・平林頼澄・同親澄・同氏親など。豊前勢は、野仲道棟・同子息道春・廷入六郎・垂水次郎・跡田弥三郎・竹井弥四郎・安心院五郎・諫山三太・田井三郎五郎入道・屋形諸利・野仲郷司・津布佐五郎次郎。肥前では、深堀時通（人道明意）・同時継・同政綱・同永浄らで、豊後・豊前・肥前三国の武士が動員されていることがわかる。

籠城軍が八ヵ月間も頑強に抵抗したのは、天然の要害で山頂近くに水があるなどのほか

に、” 福人 ” である魚返宰相房が城内の兵糧を支えたからである。魚返氏は玖珠郡の豊後清原一族で、現玖珠町北山田区平川付近にいた武士である。玖珠川をへだてた高勝寺城下の小田顕成の一族で、ともに籠城していた。

城兵は夜間に兵根米を運びいれていたのであり、包囲軍はこれに気づき、夜間の巡回を実施して日田檜原兵衛次郎下人が兵狼を運ぶのを発見して生け捕った。この間両軍ともに多くの戦死者と負傷者をだしている。

三月十一日、大友貞順・入田士寂らが籠城した最初、かれらはがらあきとなっている大友氏の本拠である府中高国府を占領しようと企てた。そこで大野莊志賀村地頭の志賀能長（頓房）はまっさきに長駆はせ参じ、高国府に旗を立てたので、國中御家人がかれのもとに集まった。このように能長が大友惣領にかわって留守中の高国府をまもり、國中御家人の着到を受けて大友方に引きわたしたのである。

六月十四日になって、籠城軍の一部はふたたび囲みを切り破って脱出し、高国府に乱入しようとした。大友勢の主力は四月以来尊氏に従って東上し、他は玖珠城攻めに動員されており、その虚をついて本拠の守護所占領をねらったものである。脱出軍は敷戸普練引・賀来弁阿閤梨・同舎弟孫五郎以下の皇室御領植田莊や賀来莊の武士で、植田莊の靈山寺に籠って衆徒を味方に引きいれ、大友方の同寺執行植田大夫房有快の館におしよせ、在家を焼き、同莊秋弘大進房父子を殺し、高国府乱入をねらった。

大友軍は大手の大將に戸次朝直、からめ手の大將に古庄円阿を命じて攻撃し、ついに城郭を焼き払った。玖珠城は十月十二日に落城した。

この間、尊氏は軍勢をひきいて東上し、建武三年六月二十五日湊川に楠正成を破り、京都に攻めいった。大友軍のなかには志賀正玄（忠能・貞朝ともいう）のように、老病のため京都に潜伏して本隊の再来を待っていたものもあり、二度の上洛合戦の辛労は莫大であった。

尊氏は同年八月十五日光明天皇を立て、十一月室町幕府をひらき、翌々建武五年八月一日征夷大將軍に任ぜられた。後醍醐天皇は延元元年（一三三六）十二月神器を奉じて吉野に潜幸し、これから南北朝対立の時代となる。

高崎城の攻防

玖珠城の陥落後は、南軍の拠点の肥後に移り、菊池武敏がもっぱら中心となって対抗した。建武四年（延元二年）四月、九州探題一色範氏・同頼行は肥後に攻め入り、菊池武重・恵良惟澄らと犬塚原に戦って北軍がやや優勢であったが決定的でなく、長期戦の様相を呈してきた。

中央では暦応元年（延元八年）ごろ北・畠山家が西上して大和・和泉方面に出撃したため二豊武士も動員され、守護大友氏泰は国衆をひきいて出陣した。ところが翌歴応二年（一三三九）十二月ごろになって、九州では少貳資時が菊池武敏に味方して軍を動かしたので、尊氏は氏泰を九州に帰し一色範氏に協力させた。

一方後醍醐天皇は九州の南軍を強化するため、延元元年（建武三年）九月懐良親王を征西大將軍に任じ、五条頼元らを補佐役として九州に派遣した。親王は伊予の忽那島をへて康永元年（興国三年（一三四二））薩摩に上陸し、出発から一三年目の貞和四年（正平三年）二月菊池にはいった。これから九州の南軍は親王の指揮下に徐々に勢力をもりかえし、探題一色範氏軍に対抗した。

ところが京都では貞和五年（正平四年）ごろから足利氏の内輪もめがおこり、これが九州の戦況に大きな影響をあたえた。事のおこりは尊氏の執事で第一級の実力者高師直と、尊氏の弟で幕政を切り盛りしていた直義とが対立し、戦争となろうとした。尊氏は師直の求に従って直義を引退させたので、直義は観応元年（正平五年）急に南朝に降参して尊氏を破った。尊氏はやむなく師直を出家させる条件で直義と和し危機を脱したが、直義が師直を殺したので両者の和は破れ、直義は北陸にのがれた。今度は尊氏が南朝にくんだり、直義はまもなく殺された。

この内乱を。観応の擾乱といい、これが九州の情勢を大きく左右したのである。

これよりさき直義は、かつて尊氏が越前の局という女性に生ませて僧にしていた直冬を養っていたが、貞和五年（正平四年）尊氏が直冬を殺そうとしたので、直冬は九州にのがれた。九州では少弐頼尚が鎌倉時代以来鎮西奉行である自家のうえに、幕府が九州探題として一色範氏を派遣したことに不平をもっていたので、直冬をむかえてこれをたすけた。直冬は九州の武士を味方に引きいれさかんに恩賞を濫発したので、勢力は急激に増大した。「太平記」には、このため国々は官方・尊氏方・直冬方に三分されたとあり、一時は大友氏も直冬に応じた。これをみて尊氏は、みずから九州に進発して直冬を討とうとしたほどであった。しかし観応二年（正平八年）十月尊氏が南朝にくだったので、大友氏時（氏泰弟、八代）も南朝につき、翌年尊氏が南朝にそむくと、二豊武士も自然両軍からはなれた。

こうした政局変転のあいだに、懐良親王は着々と勢力を伸ばしつつあった。文和元年（正平七年）十一月直冬は九州の北軍と戦って敗れ、少弐頼尚とともに南朝にくだって菊池武光と通じた。翌年一色氏は頼尚を大宰府浦城に攻めたが、菊池武光が頼尚を救援したので敗れ、一色党の大友一族田原貞広らが針摺原で戦死した。九州南軍の優勢によって、懐良親王は文和四年（正平十年）博多の探題一色範氏・直氏父子を攻めるため、肥後から肥前に攻め入り、筑前上座郡から豊後日田にでて、玖珠・由布・狭間（大分郡狭間町）をへて豊後国府（大分市）を攻略し、速見郡大神から宇佐・城井・筑前殖木を通り破竹の勢いで博多に侵入した。一色父子は長門にのがれ、大友氏時や宇佐大宮司らも親王軍に降参した。正平十三年（一三五八）二月、懐良親王が宇佐八幡に”白鞘入剣”（重文）を奉納したのは、こうした関係からである。

しかし大友氏時はまもなく南軍から離反して高崎城（大分市）に籠ったので、親王は菊池武光とともに延文三年（正平十三年）十二月、ふたたび筑後から豊後にはいって狭間を攻め、高崎城をかこんだ。大野莊志賀村（朝地町）の志賀氏房は真先にかけて、高崎山の西麓赤松の陣で奮戦し、退却した親王軍を玖珠郡八丁辻まで追撃した。

翌十四年も親王は九重山麓を通り、まず大野荘志賀村の志賀頼房（氏房父能長）の城を攻め、長駆ふたたび高崎城を攻めた。このときも勝敗が決せず退却したので、志賀氏房が追尾して肥後に攻め入り、三船城を攻め隈荘甲佐を攻略した。

不振の九州北軍は幕府に救援をもとめたが、尊氏が死去して応援ができず、康安元年（正平十六年）に斯波氏経が九州探題として派遣された。氏経は大友氏時にむかえられて海路豊後府中（大分市）にくんだり、高崎城に能った。

同年懐良親王は大宰府に入城して全九州を平定する形勢で、高崎城はこのこされた北軍の唯一の拠点として、親王軍の猛攻撃の的となった。翌年九月菊池武光が豊後府中に攻めいって万寿寺を占領し、高崎城を攻めた。志賀氏房は大野郡鳥屋城で武光軍と戦った。斯波氏経の立てなおしは成功せず、のち渋川義行が派遣されたが逃げかえり、応安四年（建徳二年〈一三七一〉）今川貞世がかわり、子義範が田原氏能にまもられ備後尾道から海路高崎城にはいった。これから翌年にかけて伊倉宮を奉ずる菊池武政の猛攻で交戦は百余回に及んだが、おとしえないで大宰府に退いた。北軍の危機をくいとめたのは、実にこの豊後の高崎城であった。

幕府は応安四年（建徳二年）、今川貞世を九州探題として派遣したとき、中国の雄、大内義弘をやって貞世を援助させた。義弘はその功により、同七年長門・豊前の守護職に任ぜられた。この結果九州の北軍の勢力はようやく強大となり、南軍を圧倒するようになるが、しかしこれが今後長く大友・大内の争いの端緒となることは注意を要する。

永和元年（天授元年〈一三七五〉）今川貞世は肥後の菊池氏を攻めるため、同国水島の陣で九州の三人衆である大友・少弐・島津の来援をもとめたが、探題の存在を喜ばない少弐冬資が参陣しなかった。そこで貞世は島津氏久に少弐の来会をすすめさせたので、冬資は氏久の顔を立てて参陣したところ、貞世は宴席で冬資を不意討ちにして切り殺した。そのため島津氏久が怒って退陣したので、貞世は水島陣をもちこたえることができなくなり、肥前国府まで退却せざるをえなかった。

そこで幕府は、同年十二月再度中国の大内義弘を援軍として派遣した。義弘は貞世をたすけて、肥後国内木原で菊池武朝を破った。今川了俊は武略のみならず、文学や歌道にも通じたすぐれた武将であり、大内義弘の援助をえ、苦心経営の結果、九州における北軍の優勢を決定的なものとした。かくて南北朝合一となり室町時代にはいるが、貞世は他の讒言によって京都に召喚されるまで二五年間在任して、応永二年（一三九五）九月九州を去った。

幕府は翌応永三年渋川満頼を九州探題に任命した。これから九州にもやや平和がつづくが、応永六年大内義弘は幕府にそむいて和泉の堺で滅ぼされた。つぎは弟の盛見（徳雄）がついだが、かれは豊前・筑前守護職を兼ね、北九州に勢力を伸ばそうとする大友氏と争うようになる。

南北朝五〇年間の戦乱は、従来南朝の大義名分と足利氏の武家政治確立の争いとみられ

たが、当時の多くの武士の動向は、貴族の支配する荘園を武士だけで支配しようとする運動、すなわち封建制確立のための戦いであった。鎌倉時代の地頭職は、荘園制における分裂した所有権の一つにすぎない、したがって本家職・領家職・預所職などの上級貴族的所有権を奪取して一円支配権を確立しようとするのが、歴史のすすむ方向である。また鎌倉時代の武士の所領（地頭職）は、散在的であったので、これを本領の付近（守護は守護国内）に集めねばならない。

遠隔地の所領は、戦乱の時代には支配権が及ばず不知行になるからである。